

タイ農村住宅に関する事例研究：経済成長下における変遷過程

著者	鳥飼 香代子, 高松 佳代, 中山 みつこ, 長浜 麻美, 吉村 千恵
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 自然科学
巻	49
ページ	147-162
発行年	2000-12-15
その他の言語のタイトル	A Case Study of Farmer's House in Thailand : Changing Process on Economic Development
URL	http://hdl.handle.net/2298/2399

タイ農村住宅に関する事例研究

— 経済成長下における変遷過程 —

鳥飼香代子・高松佳代*・中山みつこ**・長浜麻美***・吉村千恵****

A Case Study of Farmer's House in Thailand

— Changing Process on Economic Development —

Kayoko TORIKAI, Kayo TAKAMATSU, Mitsuko NAKAYAMA,
Asami NAGAHAMA and Chie YOSHIMURA

(Received September 1, 2000)

We report on the typical farmer's house in the northern area of Thailand. The traditional farmer's house is called Takayuka-shiki, and this house has a high level floor (which is about 2 meters from ground level). It is made of wood and bamboo. Today the new houses have a ground level floor and are made of concrete and steel. Of course many other features of houses are changing from the old to new ones. The new houses also make the people's life change. We should know the process of changing and the problems in new houses.

Key words : Takayuka-shiki, woods and bamboo, concrete and steel, new house

1. はじめに

タイにおける急速な経済成長は、貨幣経済を浸透させ生活様式を都市型に変貌させた。特に現金収入の増大は、住宅の建替、家電製品やバイク・車の購入、子供の進学率上昇へと生活に多大な影響を与えたと言われている¹⁾。そのような中で、都市部での今日的な住宅は、コンクリートの柱にレンガを積みモルタルや漆喰で塗った鉄筋コンクリート構造が多くなっている。都市部では耐火構造などの問題から鉄筋コンクリート化が進むことが理解できるが、今日では農村部でも鉄筋化がかなり進んでいる。これは都市化の影響と合わせ、1989年に政府が作成した森林伐採を全面的に禁止する「国家森林政策²⁾」により、伝統的住宅である高床式住宅の材料の木材が容易に入手できなくなったことも大きく影響している。従来のタイの住宅は南東部の熱帯モンスーン気候、北西部の熱帯サバンナ気候の影響下で形成されてきたといわれている。いわば暑さ対策を念頭に置いた住宅である。タイの農村住宅は、農村生活の変化というよりは都市化や木材入手難などの外からの影響下で急激な変貌を遂げ、伝統的な住宅を建設することが困難になりつつあると思われる。そこで、本論文では川島宙次著「アジアの民家」の事例をもとに1930年代と現在

* 熊本大学大学院自然科学研究科博士課程前期2年

** 熊本大学大学院教育学研究科修士課程1年

*** 熊本大学教育学部家政教育科卒業

**** 熊本学園大学社会福祉学部4年

の住宅を比較し、住宅の変遷、中でも伝統的住宅における平面構成の変容過程とその要因および問題点について探ることを目的とした。ここでは、都市型生活様式の浸透が進んでいるタイ北部に位置するタイ族農村の住宅を考察の対象とする。(図1参照)

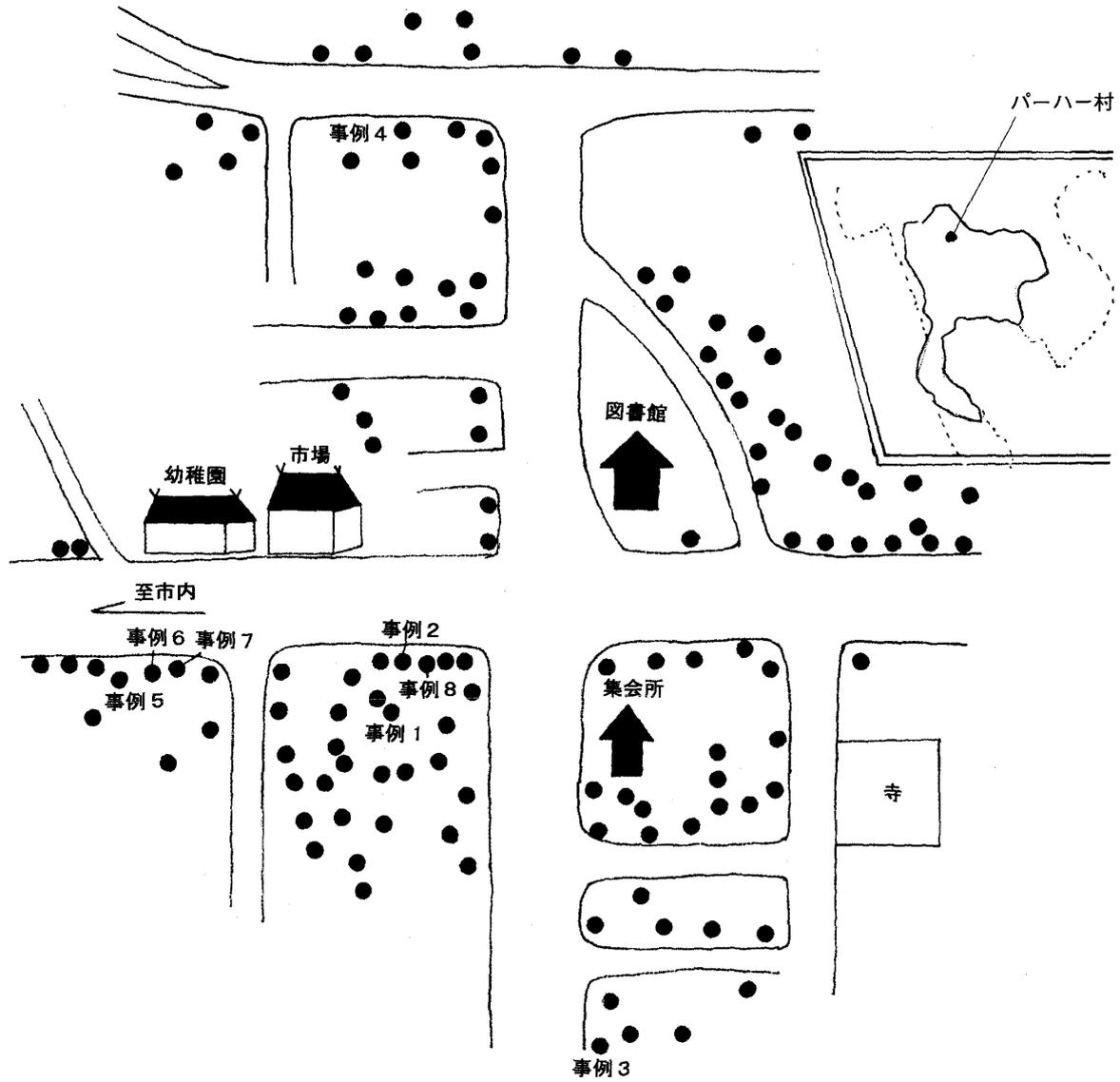


図1. 調査地区 (パーハー村)

2. 調査の方法

現地調査期間は、平成11年8月23日～9月2日の11日間である。調査内容は、戸別訪問やホームステイによる住宅平面の採取、調査紙によるヒアリング調査、部屋の写真・ビデオ撮影である。調査の具体的内容は次のとおりである。

i) 住宅平面・敷地平面の採取

(家具の配置、設備を含む)

ii) ヒアリング調査項目

- ・家族員数、家族構成、家族員の年齢、職業などの属性、村落内の血縁関係
- ・住宅の購入価格、建築年数、入手方法、部屋の使い方など

iii) 部屋の写真・ビデオ撮影

- ・外観、設備、その他特徴的な場所

i) の住宅平面の採取については、住宅内の間取りを1室ずつ描き写した。さらに、それらの居室に配置されている家具や設備、置物なども共に描き写している。

ii) のヒアリング調査は、現地の通訳 (YMCA 職員) を介して行った。また、世帯に学生がいる場合は英語を用いて行った。ヒアリングを受けた家族員は各世帯さまざまであった。

iii) の写真・ビデオ撮影は、調査後の平面図の書き漏れなどを確認するために行った。現地では、さらに集落の村長や、村の役員に対するヒアリング調査と、チェンマイの伝統的住宅の展示場を見学した。

3. 結果および考察

3-1. 高床式住宅の概略と定義

タイの年間平均気温は約27度あり、古くから人々はいかに涼しく快適に過ごせるか様々な工夫をしてきた。その結果、木材と竹を基本的な部材として使い、高床式住宅で急勾配の屋根、広いベランダをつけることが快適であることを見だし、この住宅様式が現在まで連綿と続いてきた。高床式住宅は、獣や外敵や洪水から人々を守り、通風が良く、湿気を防ぎ、高床下を多目的に使用できる利点から形成された生活の知恵の賜物である。

高床式の床は地上約2メートルほどに設け、高床下は夏でも涼しく牛舎 (クウイアン) や洪水の際に使用する小舟を収納し、また織物や農耕の作業場、憩いの場、子供の遊び場、家畜の飼育などに使用するマルチパーパス・スペースとなっている。家畜用のスペースは臭気を考慮して必ず風下に設ける。上部の床 (ベランダ) への上り口は2ヶ所あり、メインとサブに別れ、メインには簡単な門があり、彫刻を施した階段を設け、そこで履き物を脱いで上がる。アプローチの階段を上って建物に入ると、最初に共有部屋がある。そこにはほぼ床の高さまで窓が開けられている。複数ある寝室へはこの部屋から入るが、寝室の間には廊下があって、さらに床の高い厨房と倉庫に通じている。サブの上がり口は厨房へと通じる。階段幅も狭い場合がある。

外回りの柱と内部の柱の一部は、外壁や間仕切り壁を支えるだけでなく、そのまま屋根にまで達している。屋根は平面の規模に応じて、複数の棟を平行に並べ、破風を化粧の小屋組で飾る切妻屋根にするか、あるいは寄棟 (入母屋) 屋根として、妻側の頂部に煙り出しを設けるかのいずれかである。

タイでは従来、住宅材料としてチーク、固い丈夫な樹木タキアン、サック、マホガニー、ゴム、マカー、シャンピーなどの樹が使われてきた。タイ国民の大部分は広大な農村地帯の住人であるため、現在でも木造の高床式住宅に住んでいる人が多い。

3-2. 調査対象集落（パーハー村）について

パーハー村は10の村で構成される町の第9地区の村である（図1参照）。この集落は151世帯、人口528人（男255人、女273人）である。今は1世帯あたりおよそ3人と少ないが、40年前は6～12人が普通であった。人口が減少したのは、30年前からの政府の強力な家族計画政策の結果と都市への出稼ぎである。パーハー村には保育園（日本からの援助で建設）が1つある。小・中学校は他の地区にあり、ここまでが義務教育である。高校はこの集落から約9キロの所にあり、進学する者の80%がここで、残りの20%は他の地域の高校に行く。この集落の高校への進学率は100%である。また、大学への進学率は40%である。これは、タイ全土で高校への進学率が約30%、大学へは20%であることと比べると、かなり高いことがわかる。この地区は、日本を中心としたNGOやYMCAの生活向上活動のモデル地区となり、いくつかの事業推進の下で現金収入が上昇したためである。大学へは基本的に家族の援助で行くが、NGOのサポートなどもある。

地域の居住水準を上げるために、歴代の村長が力をいれた政策は、道路の舗装、電気の開通、電話の普及、農業用水をひくことである。現在は電気、電話の普及は100%である。

生産向上活動の中心は農業である。地区や全体あるいは地区内にグループを作り、米や野菜、果物を生産している。都市移住などで生産者のいなくなった農地は村単位の農家協同組合で借地として借り受け、集団で耕作している。生産物は自家用優先で、残りを売るという方針である。これは商品作物生産による農地の荒廃化からの教訓として、政府が自給自足を国民に訴えているからである。また、極力化学肥料や農薬を使わないよう指導している。

その他に、お菓子作り、縫製、ペーサー（木）からの紙作りなどが主婦層を対象に職業訓練され、その後家内工業や地域の協同組合運営の工業として定着しつつある。これが家庭の大きな現金収入源である。

さらに、今日的な動きとしてハーブ園の普及促進活動が行われている。タイではAIDS患者が多いが、化学薬品は高価なため、ハーブで代用しておりその生産を手がけているのである。これらの活動は大変評価されており、他の郡や村から見学に来るそうである（村長や役員のヒヤリングより）。

3-3. 調査事例の概要

タイにおける伝統的家族生活の特徴の一つに、「妻居制」がある。「妻居制」は、妻方の両親と同居することであり、老親扶養をも意味している。タイの仏教では、子供を育て上げることは親の義務であるし、その代わりに子供達は、老後に親の面倒をみることで、親への「恩」＝Bunkunを返すことでできると考えられている。更に仏教的考えでは、男の子は一時的に僧になる慣行によって「功德」を積み、このことを通じて親へのBunkunを返すことが可能だが、女の子は、僧になる道は開かれていない、親の老後を扶養することによって親への恩返しができるのは主に「娘」ということになる³⁾。調査した村では、男子相続の例もあり、一部では「妻居制」の崩壊がみられる。しかし、大半は「妻居制」で妻の両親や姉妹の家族がそれぞれ住宅を持ちつつ同一敷地内で居住している。このことから、今後宅地の売買や遺産相続問題、老親扶養問題が発生し、住宅の祭儀空間や個室のとり方などへ影響していくものと予想される。都市部では、結

婚による「新居制」へと移っているものの、調査の農村では、「新居制」はみられないが、「妻居制」は崩壊してきており、土地を持つ親との同居という形態がみられる。この農村では、近隣の町へ工場や企業が進出して現金収入が入るようになったものの、まだ乏しく、「制度」としての「妻居」「夫居」という考え方より、住居の状況、親の持つ資産の影響力が非常に大きい。

調査した住宅形式を概観すると高床式、部分折衷式、全面折衷式、平地式（新築2階建ても含む）の4つに分類することができた。本稿では、各分類につき2つの事例を示す、なお部分折衷式とはもともと高床の床下部分の一部（台所など）を、コンクリートやブロックで囲ってあるものを、全面折衷式とは高床の床下部分をすべて囲ってあるものである。全面折衷式と新築の二階建てとの見分けは、階段の位置や壁で判断した。全面折衷式はもともと高床式のため、階段は外に設けられているものがほとんどである。よって、二階へ上がる時は一度外に出なければならぬ。また、二階の壁は後付のため、ほとんどの家が一階はコンクリートで二階は木造となっている。では、以下に事例を示す（表1参照）。

表1 パーハー村の住宅状況

事例	年代	形態	台所	トイレ・風呂	倉庫	神棚	居間の用途	起居様式
1	1978	伝統的高床式	別棟	別棟・別室	別棟	ある	客	ユカザ
2	1979	伝統的高床式	外部	別棟・同室	別棟	なし	団・客	ユカザ
3	1977	高床式1階部分増築	別棟・DK	別棟・別室	別棟	ある	団	ユカザ
4	1975	高床式1階部分増築	一体	別棟・同室	床下	ある	団・客	ユカザ
9	不明	高床式1階部分増築	床下(外)	別棟・別室(2)	別棟(車庫)	ある	食・団・客	ユカザ
10	1969	高床式1階部分増築	外部	別棟・同室	床下	ある	団・客	ユカザ
11	1969	高床式1階部分増築	別棟	別棟・別室	別棟	ある	食・団・客	ユカザ
12	1974	高床式1階部分増築	別棟・DK	別棟・別室	別棟・床下	ある	団	ユカザ
13	1976	高床式1階部分増築	別棟	別棟・別室	別棟・床下	ある	団	ユカザ
14	1984	高床式1階部分増築	別棟	一体	別棟	祠	団・作業空間	ユカザ
15	1985	高床式1階部分増築	床下(内)	別棟・別室	別棟	ある・祠	団	ユカザ
16	1987	平地式2階建て	外部	別棟・別室	別棟	ある	団・客	折衷
7	1981	平地式2階建て	一体	別棟・別室	別棟	なし	食・団・客	折衷
8	1982	平地式2階建て	外部	別棟・別室	別棟	ある	食・団・客	イスザ
17	1990	平地式2階建て	別棟	別棟・別室	別棟	ある	食・団・客	折衷
18	1994	平地式2階建て	なし	一体・同室	別棟	なし	食・団・客	ユカザ
5	1996	平地式1階建て	別棟	別棟	なし	祭儀室・祠	食・団・客	折衷
6	1997	平地式1階建て	外部	一体・同室	なし	ある	食・団・客	ユカザ
19	1979	平地式1階建て	一体	別棟	別棟	なし	食・団・客	ユカザ
20	1991	平地式1階建て	一体	一体・同室	なし	ある	食・団・客	ユカザ
21	1993	平地式1階建て	一体	一体・別室	別棟	ある	食・団・客	折衷

高床式 〈事例1〉 図2, 写真1, 2 参照

家族構成／父 (72歳) 農業, 母 (68歳) 農業, 娘 (36歳) ゴルフ場のキャディー,
娘の夫 (45歳) 農業, 孫 (男8歳) 小学生

建築年数・建築費・建設者／21年・1万5千バーツ・集落の人の協力

延べ床面積／186.5m²

土地の入手法・価格／未開発時に入手・不明

建築材料／トタン (屋根), コンクリート (一階床) 木材 (二階壁・柱・窓・窓枠),
コンクリートブロック

室構成／床下, K, 居間 (兼祭儀空間), 個室 (3), 残余室, トイレ・浴室 (別棟)

起居様式／折衷

主な所有物／冷蔵庫, 電話,
テレビ, 自転車, 扇風機,
バイク, トラクター

将来の希望／建替えたいが,
木材が高価なためできないでいる。

部屋の使い方／靴を脱ぎ, 階段を上り戸を開けると居間があり, テレビや長椅子が置いてある。また, 藤のテーブルセットがあり, そこで接客を行う。個室3室はそれぞれ父母, 娘夫婦, 孫の就寝室である。一階の高床部分には, 縁台やタイルのテーブルセットがあり, 食事や団らんを行う場となっている。

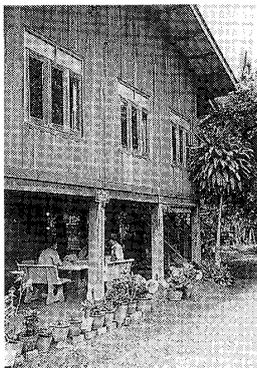
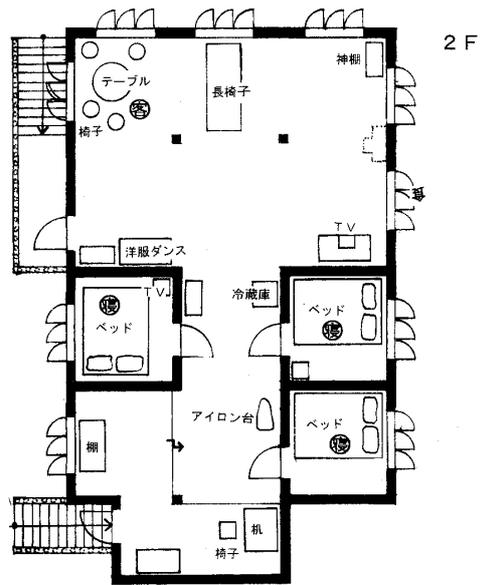
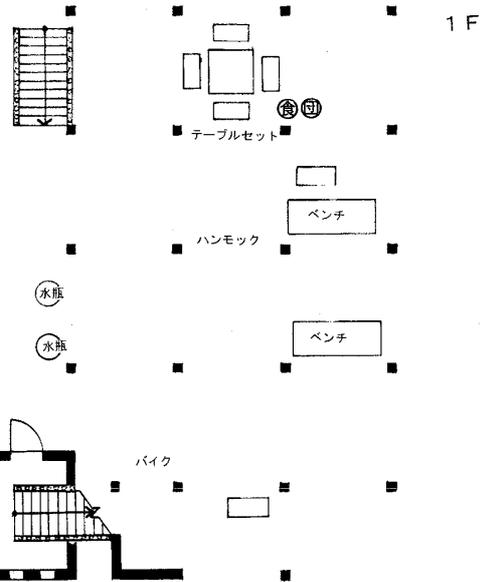
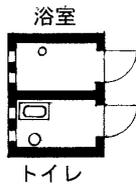


写真1
(事例1)



写真2
(事例1)

1 m

図2 高床式 (事例1)

以下、部屋の使い方については、図に（食事→食、接客→客、団らん→団、就寝→寝）のよう
に示す。

高床式 〈事例 2〉 図 3 参照

家族構成／父（46 歳）農業，母（45 歳）屋台，娘（25 歳）

農業手伝いと服飾，姪（18 歳）高校生

建築年数・建築費・建設者／不明・3 万バーツ・集落の人

延べ床面積／105.8m²

土地の入手法・価格／母方の父から譲渡

建築材料／トタン（屋根），木材（柱・壁・床），コンクリートブロック，ガラス

室構成／床下，K，居間，個室（3），残余室・トイレ（別棟）

起居様式／ユカザ

主な所有物／洗濯機，電話，車，バイク（2），自転車（2）

将来の希望／特になし

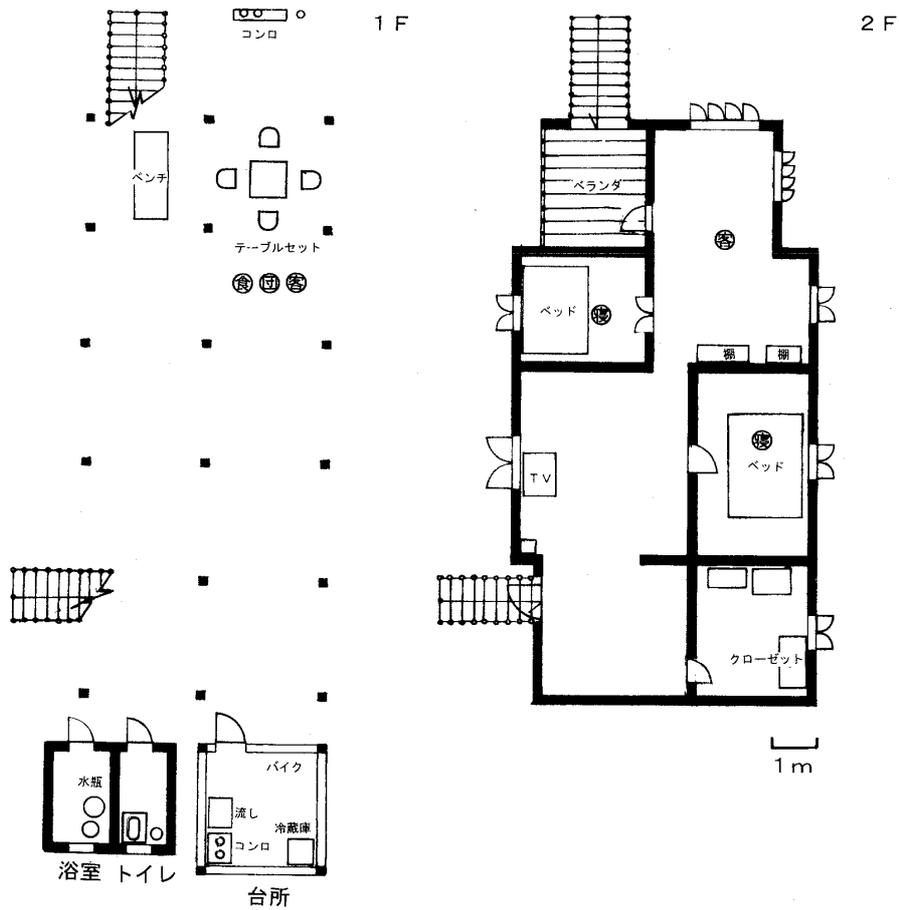


図 3 高床式（事例 2）

高床式一階部分増築 〈事例3〉 図4, 写真3, 4, 5 参照

家族構成／父（70歳）農業，母（67歳）農業，娘（37歳）農業と紙

袋製造の内職，娘の夫（37歳）農業，孫（男12歳）小学生

建築年数・建築費・建設者／22年・30万バツ・集落の人

延べ床面積／219.7m²

土地の入手法・価格／母方の祖父から譲渡

建築材料／トタン（屋根），コンクリート（一階床），木材（柱・壁・二階床），
コンクリートブロック

室構成／床下，DK（別棟），居間，個室（5），残余室，浴室・トイレ

起居様式／ユカザ

主な所有物／冷蔵庫，洗濯機，電話，車，バイク，扇風機

将来の希望／娘夫婦に譲り，改築などは任せたい

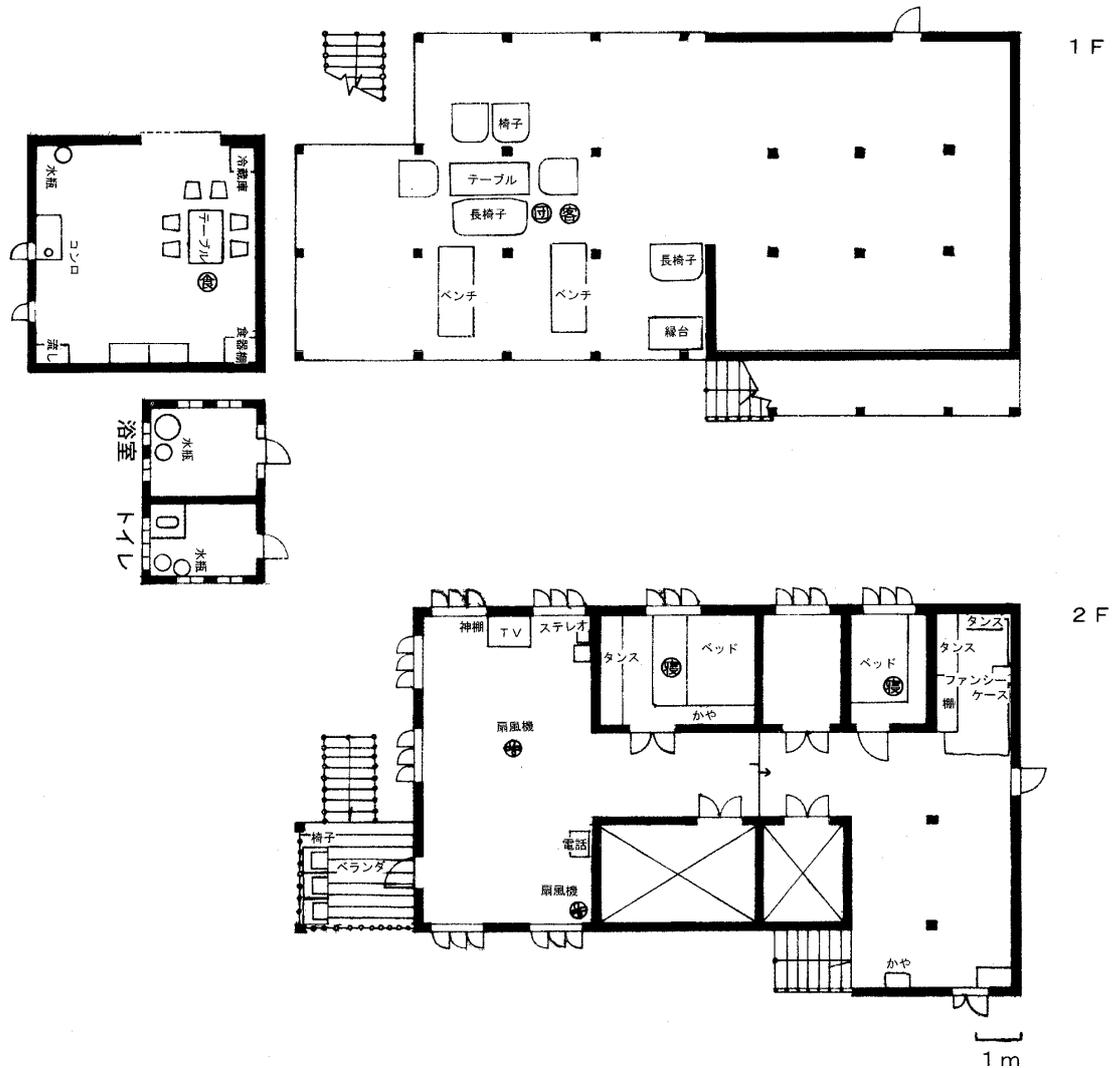


図4 高床式一階部分増築（事例3）

高床式一階部分増築 〈事例4〉 図5参照

家族構成／祖父（67歳）植林のボランティア，祖母（65歳）家事

建築年数・建築費・建設者／24年・祖父母

延べ床面積／144.9㎡

土地の入手法・価格／祖母の両親からの譲渡

建築材料／トタン（屋根），木材（柱・床・二階壁・窓），

コンクリートブロック（一階壁），ガラス

室構成／K，居間，個室（2），残余室（2），作業

空間，浴室・トイレ（別棟）

起居様式／折衷

主な所有物／電話，扇風機，自転車，トラクター，

ラジオ

将来の希望／増改築の希望はないが，よい家がある

なら移りたい



写真3
(事例3)

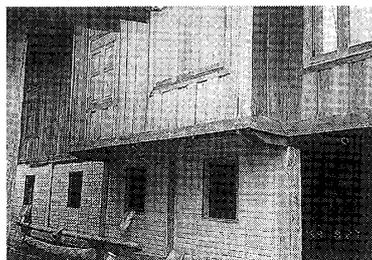


写真4
(事例3)

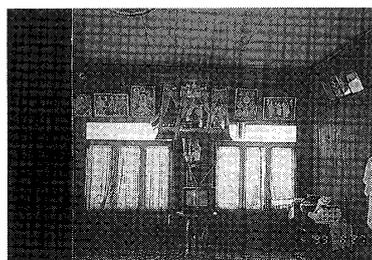
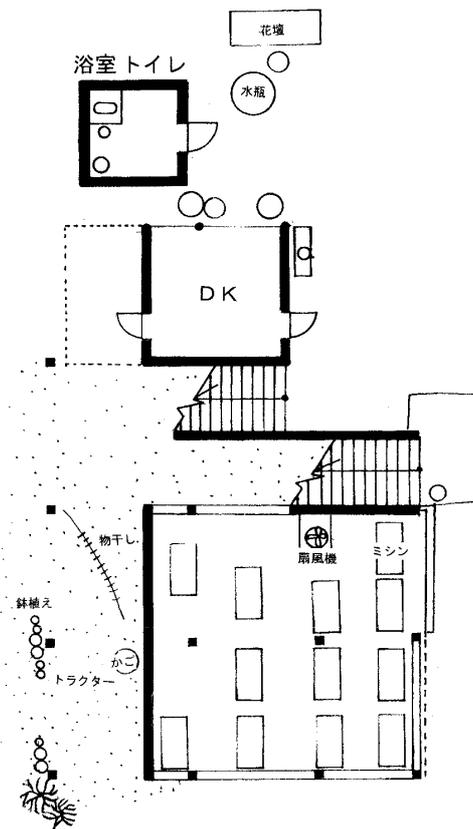
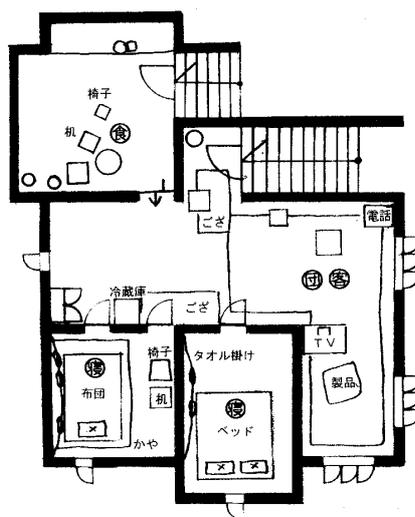


写真5
(事例3)



1 F



2 F

1 m

図5 高床式一階部分増築 (事例4)

平地式一階建て 〈事例5〉 図6, 写真6, 7参照

家族構成／父(60歳)たばこ会社を退職後年金生活, 母(57歳)

建築年数・建築費・建設者／3年・5万バーツ・地元業者

延べ床面積／105m²

土地の入手法・価格／父方の祖父から譲渡

建築材料／トタン(屋根), コンクリート(壁・床), 木材(柱・雨戸)

室構成／K(別棟), 居間, 個室(3), 祭儀空間, 残余室, 浴室・トイレ(別棟)

起居様式／ユカザ

主な所有物／冷蔵庫, 扇風機, テレビ(2), バイク(2)

将来の希望／転居, 建替えの予定なし, 長男夫婦と同居



写真6
(事例5)



写真7
(事例5)

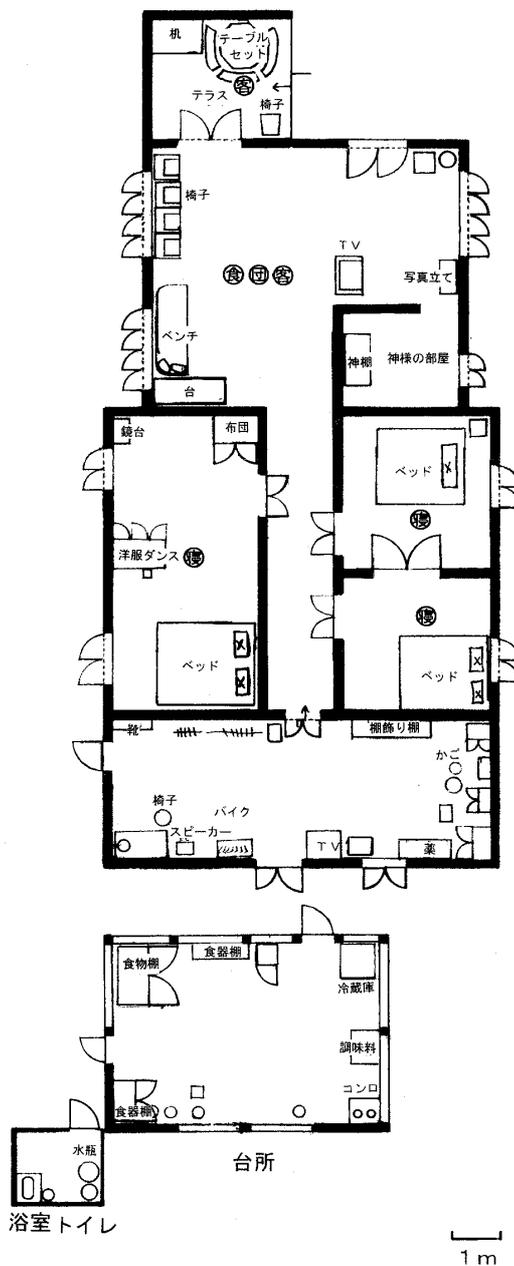


図6 平地式一階建て(事例5)

平地式一階建て 〈事例6〉 図7参照

家族構成／母（65歳）農業，娘（36歳）美容師
 建築年数・建築費・建設者／2年・25万バーツ・地元業者
 延べ床面積／100.5m²
 土地の入手法・価格／母方の両親から譲渡
 建築材料／トタン（屋根），コンクリート（壁），木材（柱・窓・窓枠），ガラス
 室構成／居間，土間（炉），個室（2），残余室（2），浴室・トイレ
 起居様式／折衷
 主な所有物／冷蔵庫，掃除機，洗濯機，電話，テレビ，車，扇風機
 将来の希望／特になし

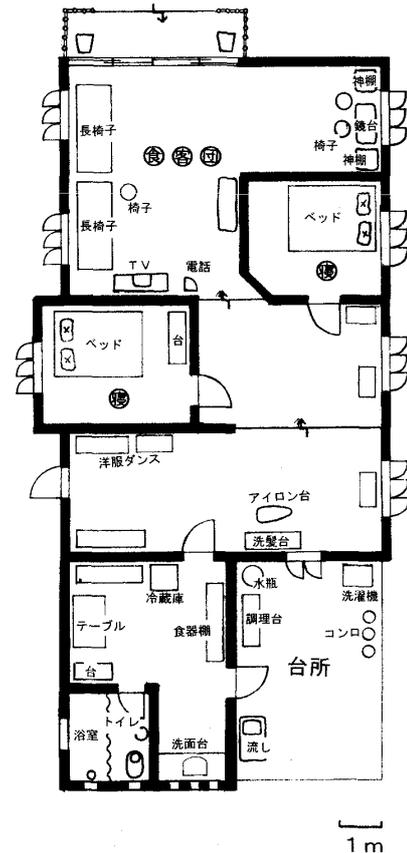
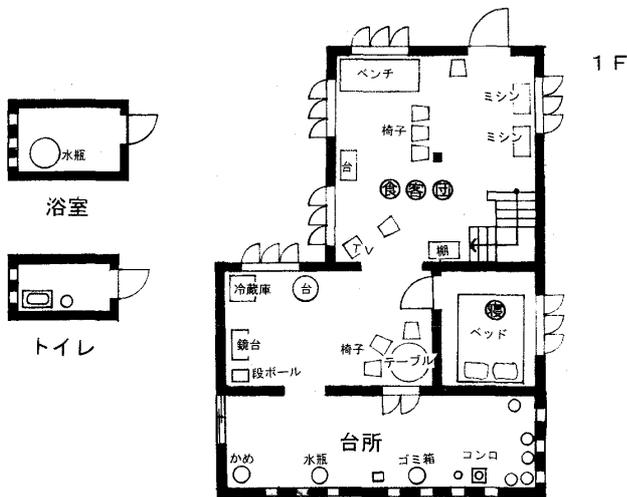


図7 平地式一階建て（事例6）

平地式二階建て 〈事例7〉 図8参照

家族構成／父（42歳）農業，母（41歳）家内制手工業，娘（17歳）高校生
 建築年数・建築費・建設者／15年・7万バーツ・父
 延べ床面積／102.9m²
 土地の入手法・価格／1981年に友人から譲渡
 建築材料／トタン（屋根），煉瓦（一階外壁），コンクリート（一階内壁・一階床・テラス），木材（二階壁・柱・窓・二階床）
 室構成／K，D，居間（兼作業空間），個室（3），テラス，浴室・トイレ（別棟）
 起居様式／ユカザ
 主な所有物／冷蔵庫，電話，テレビ，車
 将来の希望／増築と雨漏りの修理を希望，この土地に住み続けたい

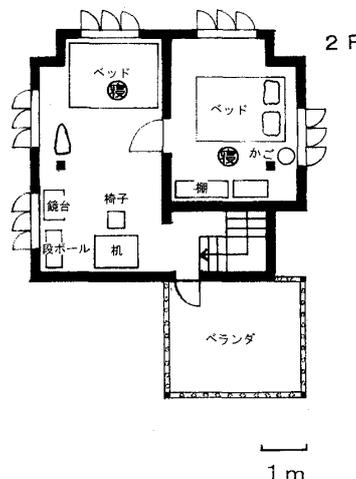


図8 平地式二階建て（事例7）

平地式二階建て 〈事例8〉 図9, 写真8, 9, 10 参照

家族構成／父 (57歳) 農業, 母 (55歳) 農業, 娘 (34歳) 床屋, 娘の夫 (35歳) 建設業,
孫 (男 16歳) 高校生

建築年数・建築費・建設者／17年・10万パーツ・地元の大工

延べ床面積／170.5m²

土地の入手法・価格／母方の父から譲渡

建築材料／トタン (屋根), コンクリート (一階壁), 木材 (二階壁・床・柱・窓・窓枠),
タイル (一階床), ガラス

室構成／K, 居間, 作業空間, 家事室, 個室 (3), 物置, トイレ・浴室 (別棟)

起居様式／ユカザ

主な所有物／冷蔵庫, 洗濯機, 掃除機, 電話, テレビ, 車 (2), 扇風機 (3)

将来の希望／お金があれば建替えたい



写真8
(事例8)

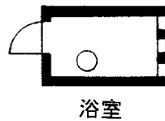
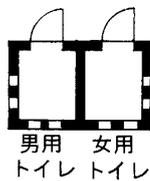


写真9
(事例8)

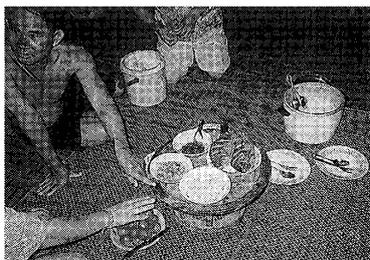


写真10
(事例8)

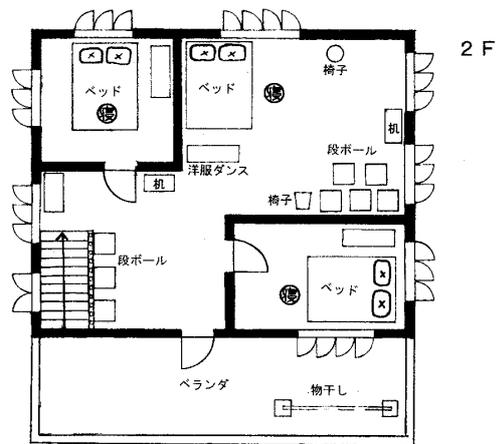
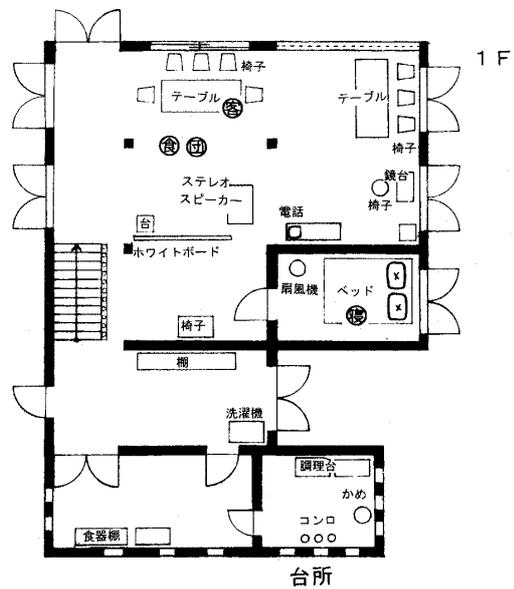


図9 平地式二階建て (事例8)

3-4. 事例の考察

住宅形式は、従来からの高床式に加え全面折衷式、部分折衷式、平地式の4つに大きく分類されることは既に述べた。高床式、平地式は土座様式に関係している。土座様式とは室内の床高のことで、室内が土間よりも高い位置に床が張られている（高床式）、グランドラインよりもほりこんで、そこに床を張らないで直接室内の床部分としている（竪穴式）、土間に直接床を張って、室内の床部分にしている（平地式）に分けられる。1930年代の伝統的住宅の場合、土座様式は高床式が主流であったが、折衷式では二階が高床式のまま残るものの、一階部分は平地式になる例も出てきた。新築の平屋の場合、完全に平地式になり、床が道路とほぼ同じ高さになる場合と、2～3段の階段を付け、テラス型の玄関ポーチから部屋に入る場合がある。居室は椅子が置かれ、イスザであるが、食事の時は直接着座しユカザスタイルでとる（写真10参照）。食卓は使用しない。さらに団らんや休息のとき、この同じ場所で、等身大のゴザなどを敷いて寝転がるスタイルをとる。日本のイスザ・ユカザ折衷の起居様式と同様であり、さらに日本と異なるのは、床そのものの高さがグランドラインと変わらない点である。そして、通風のため前面は吐き出しの板戸やシャッターの家が多い。このため、床は大変ほこりっぽい。著者らの調査は雨季であったが、それでも床の上は土ほこりで白くなっており、歩くとざらざらとした感触があった。このように、従来高床で採用されていた起居様式を平地式の床で行うことの問題は大きい。

建築材料は、1930年代までは、屋根は竹葺き、茅葺き、土瓦葺きであったが、高床式、平地式に関わらずトタン屋根になっている。床材は、高床式、折衷式は板敷きで、平地式はコンクリート敷きかタイル敷きである。平地式の場合、床下に風が通らず熱がこもるので涼しさが得にくくなるが、床がタイル敷きであるのは、暑さを和らげる対策だと思われる。また、壁も、木や竹などの自然の材料だったが、折衷式の一階部分、平地式、風呂、トイレ、台所の壁には、コンクリートやブロックが使用されるようになった。伝統的高床式住宅の場合は、木材が使用されるが、森林伐採規制のために価格が高くなり、費用によって建築材料を選ぶ必要性が出てきている。木材の使用を柱のみに抑えることが、平地式が近年普及してきた理由の一つといえる。窓にもガラス戸が普及していて、伝統的な材料の使用が減少している。

入り口については、数は高床式も平地式も2カ所以上ある例がほとんどで、平地式では勝手口のような裏に入り口のある例が多かった。1930年代のモデルでは、階段を上ったところに門がついていた。また、部屋への入り口には20cmほどの敷居があり、そこは絶対踏んではいけないとされていた。付属している戸については、高床式はすべて開き戸であったのに対し、平地式では引き違い戸もみられる。1930年代の高床式や集落の高床式は階段の下に足洗い場がある。

門、垣根については、隣家と区切りをつけるためという理由でここ10年以内に設置したものが多い。これは、土地所有の意識が生まれつつあるといえる。なお、一部で土地売買も始まっており今後、門や垣根は増加していくと思われる。しかし、親族で土地を分けた場合一つの敷地内という感覚で、塀は設置せず、自由に行き来できるようにしている。また、日中は門や窓を開放しているので、防犯意識はまだ必要ないように思われる。

次に、部屋については、1930年代では寝室に入る戸の上に、日本の欄間のような飾りが設けられており、寝室への通風を確保していた。ちなみに、窓は3枚で構成されていることが多い。古くは板戸であり、近年でもガラス戸は少ない。板戸の内側には網戸や鉄柵があり、就寝以外は網戸や鉄柵のみになる。就寝時は板戸を閉めるが、ガラス戸のように通風を断たれることはない。また、従来は家族全員で就寝しており、神棚の方に足を向けることは禁じられていた。このような就寝スタイルをとっている例もあるが、現在では、高床式にも平地式にも個室が多数みられ、

分離就寝が浸透している。しかし、寝室はほとんどの面積をベッドが占めていて、就寝するときだけ使用し、個人が個室にこもってしまい独立化する傾向はみられない。それはクーラーの普及を見ない限り、個室で就寝以外の生活行為を行うのは困難なほど暑いということの影響が大きいと思われるがさらに、ほとんどの家庭の居間に、テレビが入ったこともある。家族の団らんは、テレビのある居間か涼しい木陰、または高床下の縁台という形態はこれからも続くことが予想される。

米倉については、室内に設置してあったのが、分離して離れに設置するか、あるいは、最初から設置しないようになっていく。これは、個室数の増加で、米倉を室内に設置できないようになったことと、農業以外の職業に就くようになって、大量に米を貯蔵する必要がなくなった為と思われる。しかし、米倉を設置した場合は今日でも、通風やねずみ対策として高床式を採用している。

台所については、伝統的高床式住居では、煮炊きで熱が発生するので、暑さ対策と匂いのために調理する場（特に火を使う場）と食事する場は分離していた。台所は、住居の中でも北に位置し、食事の場は入口から入ってすぐの居間であった。また、調査地域では、食材購入や外食産業が発達しており、屋台で調理済みの食品をそのまま食卓に出したり、加熱前の段階まで加工した食材を買ってきて家で簡単に調理して食べたりで済むことが多い。以前は外か床下にコンロと食器洗いの水瓶を置いた程度の台所であったが、最近になって周りを、壁で囲むようになっていくが、上の部分は開放されていたり、金網だったり、完全に覆われた壁でない例も多くみられる。これは、野犬などの動物から食料を守る必要性からである。また、調査事例の中でも、1件だけ前述のような壁の無い台所で、周りの縁台で食事をとる例がみられた。冷蔵庫はかなり普及しているが、台所に置かれている例は少なく、居間に置かれていることが多かった。これは、水と果物の保存にのみ用いられており、食品の保存という意識が低いことが理由である。また、母屋は新築でも、台所は建て替えず古いままで、日本でも以前、みられた座り流しの家が多かった。

4. ま と め

現代のタイ農村住宅の特徴を事例からまとめると、以下のようになる。まず住宅形式をまとめると高床式、部分折衷式、全面折衷式、平地式の4つに分類することができ、高床式が伝統的なスタイルで最も古いものである。折衷式とはもともと高床の床下部分の一部や全部をコンクリートやブロックで囲ってあるもので、いわば改造されたものである。一階の壁は後付のため、ほとんどの家が1階はコンクリートで二階は木造となっている。平地式がもっとも新しく、今日の農村ではこれら4つの形式が混在している。高床式が木材と竹で作られた風通しの良い住宅であったことを考えると、鉄筋コンクリート平地式への変化は、風通しすなわち、涼しさという点から大きな問題のある住宅への変化であるといえる。

高床式や折衷式は階段を上がってから靴を脱ぐ（したがって折衷式の一階は土足である）。平地式の住居では、入口の手前で脱ぐ。入口から部屋にはいると、折衷式の住居ではほとんど道路との段差がみられない。しかし比較的新しい平地式では、道路より1段か2段上がったところに部屋がある。これらの点で比較すると、平地式は少しずつではあるが欧米型のモデルを参考にし（実際にデパートでモデル住宅の模型が展示されていたが、欧米の住宅に極めて近いものであった）欧米化しつつある、すなわち、イスザの住宅化しつつあるといえる。しかし、起居様式は高

床式住宅で行われていたユカザが色濃く残っている。この矛盾に大きな問題があるといえる。

ついで、外にあった台所などの水まわり空間が居住空間棟に内部化する傾向が指摘できる。台所の内部構造自体には、変化はみられないが、今後、新しい電化製品の普及と新しい住宅モデルの提案、食材販売や外食産業の変化により、台所の配置も変化することが予測される。現在のタイでは、電化製品は普及段階にあるので、空き空間に製品を持ち込んでおり、今後一層普及が進むことで、設計段階から電化製品の組み込まれた空間づくりが展開されることが考えられる。暑さと匂いの理由から、DKスタイルの台所が浸透していく可能性は少ないと思われる。また、調査対象の農村では、米飯だけ行い、調理済みの副食品を購入してきて自宅で食べるスタイルが日常的にとられていたが、外食産業などの展開の仕方によっては、台所の簡素化が進み、さらに同一棟への一体化が進むと考えられる。

また、トイレ・風呂については、別棟に離れて建設されているものが母屋に近接するようになり、内部化、一体化が進むと思われる。このような水まわりの内部化は従来の小規模多棟で形成されていた居住空間が大規模一棟へと集中化することを示唆させる。このことは農村住宅の形態を変えることである。というのは、大規模建築の普及は、建築材料、技術、さらに大工組織等の変化を予想させるものであるからである。農村住宅は今後急速な変化が考えられる。

居間は、どの形式の住宅でも食事、団らん、接客、祭儀などを行うマルチパーパスな空間として機能しているが、高床式、折衷式では、床下で祭儀以外の生活行為が可能なので、この場合2つの居間を所有していると考えてよい。しかし、平地式では一部屋であり、ここに生活行為の集積があり、しかも個室での生活が少ないことを考えると、個室からはみ出したものも含め、多様な生活行為の重なる空間となっていることが指摘できる。この居間に住み方上の問題が集中しているといえる。

現代タイの住居は、都市化の中で、伝統的スタイルから新しい別の形式へと移行している過渡期にある。その中でも農村は、都市を模倣する形で都市化が進んでいるが、同時に伝統的住宅を踏襲している部分もあり、矛盾と葛藤の中で農村独自のスタイルを模索しているといえる。

謝 辞

終わりに臨んで、この研究にあたり、調査に御協力いただきました荒牧弘美さん、今村桂子さん、河野友恵さん、菊川美美さん、小西理奈さん、佐藤亜紀子さん、竹原久美子さん、千代田有香さん、花村麻梨子さん、本多康司さん、及び調査対象者の方々に対し、心より御礼申し上げます。

注および参考文献・参考資料

- 1) タイの高度経済成長は国民の生活水準の改善に寄与し、貧困水準（1990年における家族一人あたりの年収が、地方で4750バーツ、都市部で7150バーツ）以下の世帯比率は、1986年の26%から90年の18%へと低下している。住宅事情も経済成長の恩恵を受け、1980年と90年を比べると水道、電気、衛生的なトイレの普及率が上昇している。家電製品もテレビ、冷蔵庫、調理ガス、バイクなど、いずれも30～40%の普及率に達した。いわゆる都市的な生活スタイルを享受できる比率が高まっている。（NATIONAL STATISTICAL OFFICE 1994）

- 2) 国家森林政策 タイの国土面積は、1960年代までは約60%が森林だったが、88年には26%にまで低下してしまった。東北タイにおける森林率は、1961年の40%強から88年には13%にまで低下している。こうした急激な森林減少の要因に、人口増加に伴う森林伐採がある。商業伐採による森林開発や不法な森林破壊の後の、零細農民の焼畑農業による農地の拡大が森林を消滅させてきた。森林の無秩序な開拓の結果、森林に生息する動植物の減少、絶滅、塩害の拡大、土壌浸食や土石流、洪水の発生等が常態化しており、農業の自然的な基盤の崩壊が深刻な問題となっている。こうした自体に対してタイ国政府は、1989年に国内の森林伐採を全面的に禁止し、森林率を40%に回復する国家森林政策を作成した。
- 3) 現代タイの家族意識の研究：チュラロンコン大学社会調査研究所、アジア女性交流・研究フォーラム、1993
- 4) タイ文化ハンドブック：松下正弘編（タイ文化研究会 執筆）一道標 微笑の国へー、p51～69, 188, けい草書房, 1995
- 5) もっと知りたいタイ：綾部恒雄・石井米雄編, p39～54, 弘文堂, 1995
- 6) 東南アジアの住まい：ジャック・デュマルセ著, 西村幸夫監修・佐藤浩司訳, p21～32, 51～56, 95～98, 学芸出版社, 1993
- 7) 東南アジア サステナブル世界への挑戦：加茂利夫・遠州尋美編, p114～140, 147～152, 196～200, 有斐閣選書, 1998
- 8) 図説アジア経済：渡辺利夫・足立文彦・文大宇著, p72～81, 日本評論社, 1998
- 9) メナムの残照（上・下）：トムヤンティ著・西野順次郎訳, 財団法人大同生命国際文化基金, 1987
- 10) 海外ビジネス事情シリーズ タイ：北村守雄著, p98～100, 総合法令, 1993
- 11) 民主化と軍部 タイとフィリピン：伊藤述史著, p13～19, 109～126, 慶應義塾大学出版会株式会社 1999
- 12) タイ人と日本人：斉藤親載著, p23～27, 学芸社, 1999
- 13) アジア経済危機を読み解く－雁は飛んでいるか：新藤榮一編, p117～125, 225～229 日本経済評論社, 1999
- 14) タイ 開発と民主主義：末廣昭著, 岩波新書, 1998
- 15) 図説世界の民家・町並み事典：吉田桂二著画, p53～68, 柏書房, 1991